

# 人でなしの恋

江戸川乱歩

青空文庫



門野、御存知でいらつしやいましょう。十年以前になくなった先の夫なのでございます。こんな日月がたちますと、門野と口に出していつて見ましても、一向他人様の様で、あの出来事にしましても、何だかこう、夢ではなかったかしら、なんて思われるほどでございます。門野家へ私がお嫁入りをしましたのは、どうした御縁からでございますかしら、申すまでもなく、お嫁入り前に、お互に好き合っていたなんて、そんなみだらなのはなく、仲人が母を説きつけて、母が又私に申し聞かせて、それを、おぼこ娘の私は、どう否やが申せましょう。おきまりでございますわ。畳にのの字を書きながら、ついうなずいてしまったのでございます。

でも、あの人が私の夫になる方かと思えますと、狭い町のこと、それに先方も相当の家柄なものですから、顔位は見知っていましたけれど、噂によれば、何となく気むずかしい方の様だとか、あんな綺麗な方のことだから、ええ、御承知かも知れませんが、門野というのは、それはそれは、凄いな美男子で、いいえ、おのろけではございません。美

しいといひます中にも、病身なせいもあつたのでございませう、どこやら陰気で、青白く、透き通る様な、ですから、一層水際立つた殿御ぶりだったのでございませう、それが、ただ美しい以上に、何かこう凄い感じを与えたのでございませう。その様に綺麗な方のことですから、きつと外に美しい娘さんもおありでしょうし、もしそうでないとしても、私の様なこのお多福が、どうまあ一生可愛がつて貰えよう、などと色々取越苦勞もしますれば、従つてお友達だとか、召使などの、その方の噂話にも聞き耳を立てるといった調子なのでございませう。

そんな風にして、段々洩れ聞いた所を寄せ集めて見ますと、心配をしていた、一方のみだらな噂などはこれっぽかりもない代りには、もう一つの氣むずかし屋の方は、どうして一通りでないことが分つて来たのでございませう。いわば変人とても申すのでございませう。お友達なども少く、多くは内の中に引込み勝ちで、それに一番いけないのは、女ざらという噂すらあつたのでございませう。それも、遊びのおつき合いをなさらぬための、そんな噂なら別条はないのですけれど、本当の女ざらいらしく、私との縁談にしましてからが、元々親御さん達のお考えで、仲人に立つた方は、私の方よりは、却て先方の御本人を説きふせるのに骨が折れたほどだと申すのでございませう。尤もそんなハッキリした噂を聞

いた訳ではなく、誰かが一寸口をすべらせたのから、私が、お嫁入りの前の娘の敏感でひとりがつてん  
 都合点をしていたのかも知れません。いいえ、いざお嫁入りをして、あんな目にあいますまでは、本当に私の都合点に過ぎないのだと、しいてもそんな風に、こちらに都合のよい様に、気休めを考えていたことでございます。これで、いくらか、うぬぼれもあつたのでございますわね。

あの時分の娘々した気持を思い出しますと、われながら可愛らしい様でございます。一方ではそんな不安を感じながら、でも、隣町の呉服屋へ衣裳の見立に参つたり、それを家 中うちじゅうの手で裁縫したり、道具類だとか、細々こまごました手廻りの品々を用意したり、その中へ先方からは立派な結納ゆいのうが届く、お友達にはお祝いの言葉やら、羨望せんぼうの言葉やら、誰かにあえばひやかされるのがなれつこになつてしまつて、それが又恥かしいほど嬉しくうれて、家中にみちみちた花やかな空気が、十九の娘を、もう有頂天うちようてんにしてしまったのでございます。

一つは、どの様な変人であろうが、氣むずかし屋さんであろうが、今申す水際立つた殿御振ぶりに、私はすっかり魅せられていたのでもございましょう。それに又、そんな性質の方に限つて、情が濃しこまかなのではないか、私なら私一人を守つて、凡てすべの愛情という愛情を私

一人に注ぎつくして、可愛がつて下さるのではないか、などと、私はまあなんてお人よしに出来ていたのでございましょう。そんな風に思っても見るのでございしました。

初めの間は、遠い先のことの様に、指折数えていた日取りが、夢の間に近づいて、近づくに従つて、甘い空想がずっと現実的な恐れに代つて、いざ当日、御婚禮の行列が門前に勢揃いをいたします。その行列が又、自慢に申すものではありませんが、十幾つりの私の町にしては飛切り立派なものでしたが、その中にはさまつて、車に乗る時の心持というのは、どなたも味わいなさることでしょうけれど、本当にもう、気が遠くなる様でございましたつけ、まるで屠所の羊でございませわね。精神的に恐しいばかりでなく、もう身内がすぎずき痛む様な、それはもう、何と申してよろしいのやら。……

## 二

何がどうなつたのですか、兎も角も夢中で御婚禮を済ませて、一日二日は、夜さえ眠つたのやら眠らなかつたのやら、舅姑がどの様な方なのか、召使達が幾人いるか、挨拶もし、挨拶されていながらも、まるで頭に残つていないという有様なのでございます。すると

う、里帰り、夫と車を並べて、夫の後姿うしろすがたを眺めながら走っていても、それが夢なのか、うつつ現なのか、……まあ、私はこんなことばかりおしやべりして、御免下さいまし、肝心の御話がどこかへ行つてしまいますね。

そうして、御婚礼のごたごたが一段落つきますと、案じるよりは生むが易いと申しますか、門野は噂程の変人というでもなく、却て世間並よりは物柔かで、私などにも、それは優しくしてくれるのでございます。私はほつと安心いたしますと、今までの苦痛に近い緊張が、すっかりほぐれてしまいました、人生というものは、こんなにも幸福なものであつたのかしら、なんて思う様になつて参つたのでございます。それに舅姑御二人とも、お嫁入前に母親が心づけてくれましたことなど、まるで無駄に思われたほど、好い御方おかたですし、外には、門野は一人子だものですから、小舅こじゅうとなどもなく、却て気抜けのする位、御嫁さんなんて気苦労のいらぬものだと思われたのでございました。

門野の男ぶりは、いいえ、そうじゃございませんのよ。これがやつぱり、お話の内なのでございますわ。そうして一しよに暮す様になつて見ますと、遠くから、垣間かいまみ見ていたのと違つて、私にとつては、生れてはじめての、この世にたった一人の方なのですもの、それは当り前でございますでしょうけれど、日が経つにつれて、段々立たちまきさつて見え、その水際

立つた男ぶりが、類なきものに思われ初めたのでございます。いいえ、お顔が綺麗だとか、そんなことばかりではありません。恋なんて何と不思議なものでございましょう、門野の世間並をはずれた所が、変人というほどではなくても、何とやら憂鬱で、しよつちゆう一途に物を思いつづけている様な、しんねりむつりとした、それで、縹緞はと申せば、今いう透き通る様な美男子なのでございますよ、それがもう、いうにいわれぬ魅力となつて、十九の小娘を、さんざんに責めさいなんだのでございます。

ほんとうに世界が一変したのでございます。二た親のもとで育てられていた十九年を現実世界にたとえますなら、御婚禮の後の、それが不幸にもたった半年ばかりの間ではありましたが、その間はまるで夢の世界か、お伽噺の世界に住んでいる気持でございました。大げさに申しますれば、浦島太郎が乙姫様の御寵愛を受けたという龍宮、世界、あれでございませぬ、今から考えますと、その時分の私は、本当に浦島太郎の様に幸福だったのでございますわ。世間では、お嫁入りはつらいものとなつていきますのに、私のはまるで正反対ですわね。いいえ、そう申すよりは、そのつらい所まで行かぬ内に、あの恐ろしい破綻が参つたという方が当たっているのかも知れませぬけれど。

その半年の間を、どの様にして暮しましたことやら、ただもう楽かつたと申す外に、こ

まごましたことなど忘れても居りますし、それに、このお話には大して関係のないことですから、おのろけめいた思出話は止しにいたしましようけれど、門野が私を可愛がつてくれましたことは、それはもう、世間のどの様な女房思いの御亭主でも、とても真似まねも出来ないほどでございました。無論私は、それをただただ有難いことに思つて、いわば陶醉してしまつて、何の疑いを抱く余裕もなかつたのでございますが、この門野が私を可愛がり過ぎたということには、あとになつて考えますと、実に恐しい意味があつたのでございませぬ。といつて、何も可愛がり過ぎたのが破綻の元だと申す訳ではありません、あの人は、真心をこめて、私を可愛がろうと努力していたに過ぎないのでございます。それが決して、だましてやろうという様な心持ではなかつたのですから、あの人が努力すればするほど、私はそれを真まに受けて、真まから手頼たよつて行く、身も心も投げ出してすがりついて行く、という訳でございました。ではなぜ、あの人がそんな努力をしましたか、尤もこれらのことは、ずっとずっと後あとになつて、やつと気づいたのではありますけれど、それには、実に恐ろしい理由があつたのでございます。

「変だな」と気がついたのは、御婚礼から丁度半年ほどたった時分でございました。今から思えば、あの時、門野の力が、私を可愛がろうとする努力が、いたましくも尽きはててしまったものに相違ありません。その隙すきに乗じて、もう一つの魅力が、グングンとあの人を、そちらの方へひっぱり出したのでございましょう。

男の愛というものが、どの様なものであるか、小娘の私が知ろう筈はずはありません。門野の様な愛し方こそ、すべての男の、いいえ、どの男にも勝まさった愛し方に相違ないと、長い間信じ切っていたのでございます。ところが、これほど信じ切っていた私でも、やがて、少しずつ少しずつ、門野の愛に何とやら偽いつわりの分子を含むことを、感はじづき初めないではいられませんでした。……………そのエクスタシイは形の上に過ぎなくて、心では、何か遙はるかなものを追っている、妙に冷い空虚を感じたのでございます。私を眺める愛撫のまなざしの奥には、もう一つの冷い目が、遠くの方を凝視しているのでございます。愛の言葉ことばを囁ささやいてくれます、あの人の声音こゝねすら、何とやらうつろで、機械仕掛の声の様にも思われるのでございます。でも、まさか、その愛情が最初から総すべて偽りであったなどは、当時の私には思いも及ばぬことでした。これはきつと、あの人の愛が私から離れて、どこか

の人に移りはじめたしるしではあるまいか、そんな風に疑<sup>うたぐ</sup>つて見るのが、やっとだったの  
でございます。

疑いというものの癖<sup>くせ</sup>として、一度そうしてきざしが現れますと、丁度夕立雲が広がる時  
の様な、恐しい早さでもって、相手の一挙一動、どんな微細な点までも、それが私の心一  
杯に、深い深い疑惑の雲となつて、群<sup>むら</sup>がり立つのでございます。あの時の御言葉の裏には  
きつとこういう意味を含んでいたに相違ない。いつやらの御不在は、あれは一体どこへい  
らしたのであろう。こんなこともあつた、あんなこともあつたと、疑い出しますと際限  
がなく、よく申す、足の下の地面が、突然なくなつて、そこへ大きな真暗な空洞が開けて、  
はて知れぬ地獄へ吸い込まれて行く感じなのでございます。

ところが、それほど疑惑にも拘<sup>かか</sup>わらず、私は何一つ、疑い以上の、ハッキリしたものを  
掴<sup>つか</sup>むことは出来ないのぞございました。門野<sup>か</sup>が家を<sup>うち</sup>あけると申しましても、極<sup>わ</sup>く僅<sup>ずか</sup>の間で、  
それが大<sup>たい</sup>抵<sup>たい</sup>は行<sup>ゆき</sup>先<sup>さき</sup>が知れているのですし、日記帳<sup>じ</sup>だとか手紙類<sup>てがみ</sup>、写真<sup>し</sup>までも、こつそ  
り調べて見ましても、あの人の心持<sup>こころもち</sup>を確<sup>た</sup>め得<sup>え</sup>る様な跡<sup>あと</sup>は、少しも見<sup>み</sup>つかりはしないのでご  
ざいます。ひよつとしたら、娘心<sup>むすめこころ</sup>のあさはかにも、根<sup>ね</sup>もないことを疑<sup>うた</sup>つて、無駄<sup>むだ</sup>な苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>を  
求<sup>もと</sup>めているのではないかしら、幾<sup>いく</sup>度<sup>ど</sup>か、そんな風に反省<sup>はんげん</sup>して見<sup>み</sup>ましても、一度<sup>いちど</sup>根<sup>ね</sup>を張<sup>は</sup>つた

疑惑は、どう解こうすべもなく、ともすれば、私の存在をさえ忘れ果てた形で、ぼんやりと一つ所を見つめて、物思いに耽ふけっているあの人の姿を見るにつけ、やっぱり何かあるに相違ない、きつときつと、それに極きまっている。では、もしや、あれではないのかしら。といますのは、門野は先から申します様に、非常に憂鬱なたちだものですから、自然引ひっこ込思案で、一間まにとじ籠こもって本を読んでいる様な時間が多く、それも、書齋では気が散みつていけないと申し、裏に建っていました土蔵の二階あかへ上つて、幸いそこに先祖から伝わった古い書物が沢たくさん山積んでありましたので、薄暗い所で、夜などは昔ながらの雪洞ほんほりをともして、一人ぼつちで書見しよけんをするのが、あの人の、もっと若い時分からの、一つの楽たのしみになっていたのでございます。それが、私が参つてから半年ばかりというものは、忘れた様に、土蔵のそばへ足ぶみもしなくなっていたのが、ついその頃になって、又しても、繁しげしげ々と土蔵へ入る様になって参つたのでございます。この事柄に何か意味がありはしないか。私はふとそこへ気がついたのでございました。

## 四

土蔵の二階で書見をするというのは少し風変りと申せ、別段とがむべきことでもなく、何の怪しい訳もない、と一応はそう思うのですけれど、又考え直せば、私としましては、出来るだけ気を配つて、門野の一挙一動を監視もし、あの人の持物なども検べましたのに、何の変つた所もなく、それで、一方ではあの抜けがらの愛情、うつろの目、そして時には私の存在をすら忘れたかと思える物思いでございましょう。もう蔵の二階を疑いでもする外には、何のてだても残つていないのでございます。それに妙なものは、あの人が蔵へ行きますのが、極つて夜更けなことで、時には隣に寝ています私の寝息を窺う様にして、こつそりと床の中を抜け出して、御小用にでもいらつしたのかと思つていますと、そのまま長い間歸つていらつしやらない。縁側に出て見れば、土蔵の窓から、ぼんやりとあかりがついているのでございます。何となく凄いな、いうにいわれない感じに打たれることが屢々なのでございます。土蔵だけは、お嫁入りの当時、一巡中を見せて貰いましたのと時候の変わり目に二度入つたばかりで、たとえ、そこへ門野がとじ籠つていまして、まさか、蔵の中に私をうとうとしくする原因がひそんでいようとも考えられませんので、別段、あとをつけて見たこともなく、従つて蔵の二階だけが、これまで、私の監視を脱れていたのをございます、それをすら、今は疑いの目を以て見なければならなくなつ

たのでございます。

お嫁入りをしましたのが春の半なかば、夫に疑いを抱き始めましたのがその秋の丁度名月時分  
でございました。今でも不思議に覚えていますのは、門野が縁側に向うむきに蹲うずくまつて、青  
白い月光に洗われながら、長い間じつと物思いに耽たつていた、あのうしろ姿、それを見て、  
どういう訳か、妙に胸を打たれましたのが、あの疑惑のきっかけになったのでございます。  
それから、やがてその疑いが深まって行き、遂には、あさましくも、門野のあとをつけて、  
土蔵の中へ入るまでになったのが、その秋の終りのことでもございました。

何というはかない縁えにしでありましょう。あの様にも私を有頂天にさせた、夫の深い愛情が  
(先にも申す通り、それは決して本当の愛情ではなかったのですけれど) たった半年の間  
にさめてしまって、私は今度は玉手箱をあけた浦島太郎の様に、生れて初めての陶酔境か  
ら、ハツと眼覚めると、そこには恐しい疑惑と嫉妬しつとの、無限地獄むげんが口を開いて待っていた  
のでございます。

でも最初は、土蔵の中が怪しいなどとハッキリ考えていた訳ではなく、疑惑に責められ  
るまま、たった一人の時の夫の姿を垣間見て、出来るならば迷いを晴らしたい、どうかそ  
こに私を安心させる様なものがあってくれます様にと祈りながら、一方ではその様な泥坊

じみた行いが恐しく、といって一度思い立ったことを、今更中止するのは、どうにも心残りなままに、ある晩のこと、あわせ拾一枚ではもう肌寒い位で、この頃まで庭に鳴きしきっていました、秋の虫共も、いつか声をひそめ、それに丁度闇夜で、庭下駄にわげたで土蔵への道々、空をながめますと、星は綺麗でしたけれど、それが非常に遠く感じられ、不思議と物淋ものさびしい晩のことでありましたが、私はとうとう、土蔵へ忍びこんで、その二階にいる筈の夫の隙見すきみを企くわだてたのでございます。

もう母屋おもやでは、御両親をはじめ召使達も、とつくに床についておりました。田舎町いなかの広い屋敷のことでございますから、まだ十時頃というのに、しんと静まり返って、蔵まで参りますのに、真つ暗なしげみを通るのが、こわい様でございました。その道が又、御天気でもじめじめした様な地面で、しげみの中には、大きな蝦蟇がまが住んでいて、グルルル……グルルル……といやな鳴き声さえ立てるのでございましょう。それをやつと辛抱しんぼうして、蔵の中へたどりついて、そこも同じ様に真つ暗で、樟しょう脳のうのほのかな薫りかおに混つて、冷い、かび臭い蔵特有の一種の匂いが、ゾーツと身を包むのでございます。もし心の中に嫉妬の火が燃えていなかったら、十九の小娘に、どうまああの様な真似が出来ましょう。本当に恋ほど恐しいものはございませんわね。

闇の中を手探りで、二階への階段まで近づき、そつと上を覗いて見ますと、暗いのも道理、梯子段はしごだんを上った所の落し戸が、ピッタリ締しまつていたのでございます。私は息を殺して、一段一段と音のせぬ様に注意しながら、やつとのことで梯子の上まで昇り、ソツと落し戸を押し試みて見ましたが、門野の用心深いことには、上から締りをして、開かぬ様になつてゐるではございませんか。ただ御本を読むのなら、何も錠まで卸おろさなくても、そんな一寸したことまでが、気懸きがりの種になるのでございます。

どうしようかしら。ここを叩たたいて開けて頂こうかしら。いやいや、この夜更けに、そんなことをしたなら、はしたない心の内を見すかされ、猶な更疎おさらうとんじられはしないかしら。でも、この様な、蛇の生殺しの様な状態が、いつまでも続くのだつたら、とても私には耐えられない。一そ思い切つて、ここを開けて頂いて、母屋から離れた蔵の中を幸いに、今夜こそ、日頃の疑いを夫の前にさらけ出して、あの人の本当の心持を聞いて見ようかしら。などと、とつおいつ思い惑つて、落し戸の下に佇たんでいました時、丁度その時、実に恐ろしいことが起こつたのでございます。

## 五

その晩、どうして私が蔵の中へなど参つたのでございましょう。夜更けに蔵の二階で、何事のあるう筈もないことは、常識で考えても分りそうなものですのに、ほんとうに馬鹿馬鹿しい様な、疑心暗鬼ぎしんあんきから、ついそこへ参つたというのは、理窟りくつでは説明の出来ない、何かの感応があつたのでございましょうか。俗にいう虫の知らせでもあつたのでございましょうか。この世には、時々常識では判断のつかない様な、意外なことが起るものでございします。その時、私は蔵の二階から、ひそひそ話はなしの声を、それも男女二人の話はなし声を、洩れ聞いたのでございしました。男の声はいうまでもなく門野のでしたが、相手の女は一体全体何者でございましょうか。

まさかまさかと思つていました、私の疑いが、余りに明かな事実となつて現れたのを見ますと、世慣れぬ小娘の私は、ただもうハツとして、腹立たしいよりは恐ろしく、恐ろしさど、身も世もあらぬ悲しさに、ワツと泣き出したいのを、僅ににくいしめて、瘡おこりの様に身を戦かせながら、でも、そんなでいて、やっぱり上の話声に聞き耳を立てないではいられなかつたのでございします。

「この様なおう瀬を続けていては、あたし、あなたの奥様にすみませんわね」

細々とした女の声は、それが余りに低いために、殆ど聞き取れぬほどでありましたが、  
聞えぬ所は想像で補って、やっと意味を取ることが出来たのでございます。声の調子で察  
しますと、女は私よりは三つ四つ年かさで、しかし私の様にこんな太つちようではなく、  
ほっそりとした、丁度泉鏡花さんの小説に出て来る様な、夢の様に美しい方に違いないの  
でございます。

「私もそれを思わぬではないが」と、門野の声がいうのでございます。「いつもいって聞か  
せる通り私はもう出来るだけのことをして、あの京子を愛しようと努めたのだけれど、  
悲しいことには、それがやっぱり駄目なのだ。若い時から馴染を重ねたお前のことが、ど  
う思い返しても、思い返しても、私にはあきらめ兼ねるのだ。京子にはお詫のしようもな  
いほど済まぬことだけれど、済まない済まないと思いつながら、やっぱり、私はこうして、  
夜毎にお前の顔を見ないではいらぬのだ。どうか私の切ない心の内を察しておくれ」  
門野の声ははつきりと、妙に切口上に、せりふめいて、私の心に食い入る様に響い  
て来るのでございます。

「嬉しうございます。あなたの様な美しい方に、あの御立派な奥様をさし置いて、それほ  
どに思つて頂くとは、私はまあ、何という果報者でしょう。嬉しうございますわ」

そして、極度に鋭敏になった私の耳は、女が門野の膝ひざにでももたれたらしい氣勢けはいを感じるのでございます。……………

…  
 まあ御想像なすつても下さいませ。私のその時の心持がどの様でございましたか。もし今の年でしたら、何の構うことがあるものですか、いきなり、戸を叩き破つてでも、二人のそばへ駈込んで、恨みつらみのありたけを、並べましたでしょうけれど、何を申すにも、まだ小娘の当時では、とてもその様な勇氣が出るものではございません。込み上げて来る悲しさを、袂たもとの端で、じつと押えて、おろおろと、その場を立去りも得えせず、死ぬる思いを続けたことでございます。

やがて、ハツと気がつきますと、ハタハタと、板いたの間まを歩く音がして、誰かが落し戸の方へ近づいて参るのでございます。今ここで顔を合わせては、私にしましても、又先方にしましても、あんまり恥かしいことですから、私は急いで梯子段おりを下ると、蔵の外へ出て、その辺の暗闇へ、そつと身をひそめ、一つには、そうして女奴めの顔をよく見覚えてやりましょうと、恨みに燃える目をみはつたのでございます。ガタガタと、落し戸を開く音がして、パツと明りがさし、雪洞を片手に、それでも足音を忍ばせて下りて来ましたのは、ま

ごう方<sup>かた</sup>なき私の夫、そのあとに続く奴めと、いきまいて待てど暮せど、もうあの人は、蔵の戸をガラガラと締めて、私の隠れている前を通り過ぎ、庭下駄の音が遠ざかっていったのに、女は下りて来る氣勢もないのでございます。

蔵のことゆえ一方口で、窓はあつても、皆金網で張りつめてありますので、外<sup>ほか</sup>に出口はない筈。それが、こんなに待つても、戸の開く氣勢も見えぬのは、余りといえば不思議なことでございます。第一、門野が、そんな大切な女を一人あとに残して、立去る訳もありません。これはもしや、長い間の企<sup>たく</sup>らみで、蔵のどこかに、秘密な抜け穴でも拵<sup>こしら</sup>えてあるのではなからうか。そう思えば、真つ暗な穴の中を、恋に狂った女が、男にあいたさ一心で、怖<sup>おそ</sup>わさも忘れ、ゴソゴソと匍<sup>は</sup>つている景色が幻の様に目に浮かび、その幽<sup>かす</sup>かな物音さえも聞える様で、私は俄に、そんな闇の中に一人でいるのが怖<sup>こ</sup>わくなつたのでございます。また夫が私のいないのを不審に思つてはと、それも気がかりなものですから、兎も角も、その晩は、それだけで、母屋の方へ引<sup>ひきかえ</sup>返すことにいたしました。

## 六

それ以来、私は幾度闇夜の蔵へ忍んで参ったことでございましょう。そして、そこで、夫達の様々の睦言むつごとを立聞きしては、どの様に、身も世もあらぬ思いをいたしたことでございましょう。その度たびごと毎に、どうかして相手の女を見てやりましょうと、色々に苦心をしたのですけれど、いつも最初の晩の通り、蔵から出て来るのは夫の門野だけで、女の姿などはチラリとも見えはしないのでございませぬ。ある時はマツチを用意して行きまして、夫が立去るのを見すまし、ソツと蔵の二階へ上あがつて、マツチの光でその辺を探し廻つたこともありました、どこへ隠れる暇いとまもないのに、女の姿はもう影もささぬのでございませぬ。またある時は、夫の隙を窺つて、昼間、蔵の中へ忍び込み、隅から隅を覗き廻つて、もしや抜け道でもありはしないか、又ひよつとして、窓の金網でも破れてはしないかと、様々に検べて見たのですけれど、蔵の中には、鼠ねずみ一匹逃げ出す隙間も見当たらずなのでございませぬ。

何という不思議でございましょう。それを確めますと、私はもう、悲しさ口惜くちやしさよりも、いうにいわれぬ不気味さに、思わずゾツとしないではいられませんでした。そうしてその翌晩になれば、どこから忍んで参るのか、やつぱり、いつもの艶なまめかしい囁き声が、夫との睦言を繰返くりかえし、又幽霊の様に、いずことも知れず消え去つてしまうのでございま

す。もしや何かの生霊いきりようが、門野に魅入みいっているのではないでしょうか。生来憂鬱で、どこことなく普通の人と違つた所のある、蛇を思わせる様な門野には（それ故ゆえに又、私はあれほども、あの人に魅せられていたのかも知れませんが）そうした、生霊という様な、異形いぎようのものが、魅入り易いものではありません。などと考えますと、はては、門野自身が、何かこう魔性ましようのものにさえ見え出して、何とも形容の出来ない、変な気持になつて参るのでございます。一そのこと、里へ歸つて、一伍一什いちぶしじゅうを話そうか、それとも、門野の親御さま達に、このことをお知らせしようか、私は余りの怖わさ不気味さに幾度いくたびかそれを決心しかけたのですけれど、でも、まるで雲を掴む様な、怪談めいた事柄を、うかつにいい出しては頭から笑われそうで、却て恥をかく様なことがあつてはならぬと、娘心にもヤツと堪こたえて、一日二日と、その決心を延ばしていたのでございます。考えて見ますと、その時分から、私は随分きかん坊でもあつたのでございますわね。

そして、ある晩のことでもございました。私はふと妙なことに気づいたのでございます。それは、蔵の二階で、門野達のいつものおう瀬が済みまして、門野がいぎ二階を下りるという時に、パタンと軽く、何かの蓋ふたのしまる音がして、それから、カチカチと錠前でも卸すらしい氣勢がしたのでございます。よく考えて見れば、この物音は、ごく幽かではあり

ましたが、いつの晩にも必ず聞いた様に思われるのでございます。蔵の二階でそのような音を立てるものは、そこに幾つも並んでいます。長持ながもちの外ほかにはありません。さては相手の女は長持の中に隠れているのではないかしら。生きた人間なれば、食事も摂とらなければならず、第一、息苦しい長持の中に、そんな長い間忍んでいられよう道理はない筈ですけれど、なぜか、私には、それがもう間違いのない事実の様に思われて来るのでございます。そこへ気がつきますと、もうじつとしてはいられません。どうかして、長持の鍵を盗み出して、長持の蓋をあけて、相手の女奴を見てやらないでは気が済まぬのでございます。なあに、いざとなったら、くいついてでも、ひっ搔いてでも、あんな女に負けてなるものか、もうその女が長持の中に隠れているときまりでもした様に、私は歯ぎしりを噛んで、夜のあけるのを待ったものでございます。

その翌日、門野の手文庫から鍵を盗み出すことは、案外易々やすやすと成功いたしました。その時分には、私はもうまるで夢中ではありましたが、それでも、十九の小娘にしましては、身に余る大仕事でございました。それまでとても、眠られぬ夜が続く、さぞかし顔色も青ざめ、身体からだも痩せ細やっていたことでありましょう。幸い御両親とは離れた部屋おに起き伏ふししていましたのと、夫の門野は、あの人自身のこと夢中になっていましたのと、

その半月ばかりの間を、怪しまれもせず過ごすことが出来たのでございます。さて、鍵を持って、昼間でも薄暗い、冷たい土の匂いのする、土蔵の中へ忍び込んだ時の気持、それがまあ、どんなでございましたか。よくまああの様な真似が出来たものだど、今思えば、一そ不思議な気もするのでございます。

ところが鍵を盗み出す前でしたか、それとも蔵の二階へ上りながらでありましたか、千々に乱れる心の中で、わたしはふと滑稽なことを考えたものでございます。どうでもよいことではありませんけれど、ついでに申上げて置きましょうか。それは、先日からのあの話声は、もしや門野が独で、声色を使っていたのではないかという疑いでございました。まるで落し話の様な想像ではありませんが、例えば小説を書きますためとか、お芝居を演じますためとかに、人に聞えない蔵の二階で、そつとせりふのやり取りを稽古していらしたのではあるまいか、そして、長持の中には女なぞではなくて、ひよつとしたら、芝居の衣裳でも隠してあるのではないか、という途方もない疑いでございました。ほほほほほ、私はもうのぼせ上っていたのでございますわね。意識が混乱して、ふとその様な、我身に都合のよい妄想が、浮かび上るほど、それほど私の頭は乱れ切っていたのでございます。なぜと申して、あの睦言の意味を考えましても、その様な馬鹿馬鹿しい声色を使う人が、

どこの世界にあるものでございますか。

## 七

門野家は町でも知られた旧家だものですから、蔵の二階には、先祖以来の様々の古めかしい品々が、まるで骨董屋の店先の様に並んでいるのでございます。三方の壁には今申す丹塗りの長持が、ズラリと並び、一方の隅には、昔風の縦に長い本箱が、五つ六つ、その上には、本箱に入り切らぬ黄表紙、青表紙が、虫の食った背中を見せて、ほこりまみれに積み重ねてあります。棚の上には、古びた軸物の箱だとか、大きな紋のついた両掛け、葛籠の類、古めかしい陶器類、それらに混つて、異様に目を惹きますのは、鉄漿の道具だという、巨大なお椀の様な塗物、塗り盥、それには皆、年数がたつて赤くなつてはいますけれど、一々金紋が蒔絵になつているのでございます。それから一番不気味なのは、階段を上つたすぐの所に、まるで生きた人間の様に鎧櫃の上に腰かけている、二つの飾り具足、一つは黒糸緘のいかめしいので、もう一つはあれが緋緘と申すのでしようか、黒ずんで、所々糸が切れてはいましたけれど、それが昔は、火の様に燃えて、さぞ

かし立派なものだったのでございましょう。兜かぶともちゃんと頂いて、それに鼻から下を覆う、あの恐ろしい鉄の面までも揃っているのでもございします。昼でも薄暗い蔵の中で、それをじつと見ていますと、今にも籠手こて、脛すね当あてが動き出して、丁度頭の上に懸かけてある、大身おおみの槍やりを取るかとも思われ、いきなりキャツと叫んで、逃げ出したい気持ちさえいたすのでございします。

小さな窓から、金網を越して、淡い秋の光がさしてはいますけれど、その窓があまりに小さいため、蔵の中は、隅の方になると、夜の様に暗く、そこに蒔絵まきゑだとか、金具かねぐしだとかいうものだけが、魑魅魍魎ちみもうりょうの目の様に、怪しく、鈍く、光っているのでございします。その中で、あの生霊の妄想を思い出しでもしようものなら、女の身で、どうまあ辛抱が出来ますしよう。その怖おそわさ恐おそろしさを、やつと堪こたえて、兎も角も、長持ながぢを開くことが出来ましたのは、やつぱり、恋こという曲く者せものの強い力でございしましょうね。

まさかそんなことがと思おもいながら、でも何となく薄気味悪うすきまゐくて、一つ一つ長持の蓋を開く時には、からだ中から冷ひやいものがにじみ出し、ハツと息も止まる思おもいでございしました。ところが、その蓋かを持上げて、まるで棺か桶おけの中なかでも覗のぞく気きで、思おもい切きって、グツと首くびを入れて見みますと、予期よきしてありました通り、或あるは予期に反ひして、どれもこれも古めかしい衣い

類だとか、夜具、美しい文庫類などが入っているばかりで、何の疑わしいものも出ては来ないのでございます。でも、あの極った様に聞えて来た、蓋のしまる音、錠前のおりる音は、一体何を意味するのでありましょう。おかしい、おかしいと思いつながら、ふと目にとまったのは、最後に開いた長持の中に、幾つかの白木の箱がつみ重なっていて、その表に、床ゆかしいお家流で「お雛様ひなさま」だとか「五人ばやし囃子」だとか「三人上戸じょうご」だとか、書き記しるしてある、雛人形の箱でございました。私は、どこにも怪しいものがないことを確めて、いくらか安心していたのでもありましょう、その際ながら、女らしい好奇心から、ふとそれらの箱を開けて見る気になりました。

一つ一つ外に取り出して、これがお雛様、これが左近さこんの桜、右近うこんの橘たちばなと、見て行くに従って、そこに、樟腦の匂いと一緒に、何とも古めかしく、物懐しい気持が漂って、昔物のきめの濃こまやかな人形の肌が、いつとなく、私を夢の国へ誘って行くのでございました。私はそうして、暫くの間は、雛人形で夢中になっていましたが、やがてふと気がつきますと、長持の一方の側がわに、外ほかのとは違って、三尺以上もある様な長方形の白木の箱が、さも貴重品といった感じで、置かれてあるのでございます。その表には、同じくお家流で「押ははいりよよ領う」と記されてあります。何であろうと、そつと取り出して、それを開いて中の物を一

目見ますと、ハツと何かの気に打たれて、私は思わず顔をそむけたのでございます。そして、その瞬間に靈感というのは、ああした場合を申すのでございましょうね、数日来の疑いが、もう、すっかり解けてしまったのでございます。

## 八

それほど私を驚かせたものが、ただ一個の人形に過ぎなかつたと申せば、あなたはきつと「なあんだ」とお笑いなさるかも知れません。ですが、それは、あなたが、まだ本当の人形というものを、昔の人形師の名人が精根を尽くして、拵え上げた芸術品を、御存知ないからでございます。あなたはもしや、博物館の片隅なぞで、ふと古めかしい人形に出あつて、その余りの生々しさに、何とも知れぬ戦慄をお感じなすつたことはないでしょうか。それが若し女児人形や稚児人形であつた時には、その持つ、この世の外の夢の様な魅力に、びつくりなすつたことはないでしょうか。あなたは御みやげ人形といわれるものの、不思議な凄味を御存知でいらつしやいませうか。或は又、往昔衆道の盛んでございました時分、好き者達が、馴染の色若衆の似顔人形を刻ませて、日夜愛撫したとい

う、あの奇態な事実を御存知でいらつしやいまいしょうか。いいえ、その様な遠いことを申さずとも、例えば、ぶんらく文楽の浄瑠璃人形にまつわる不思議な伝説、近代の名人安本亀八の生人形いきなどを御承知でございましたなら、私がある時、ただ一個の人形を見て、あの様に驚いた心持を、十分御察し下さることが出来ると存じます。

私が長持の中で見つけました人形は後のちになつて、門野のお父さまに、そつと御尋ねして知つたのでございますが、殿様から拝領の品とかで、あんせい安政の頃の名人形師立木と申す人の作と申すことでございます。俗に京人形と呼ばれておりますけれど、実は浮世人形うきよとやらいうものなそうで、身みの丈たけ三尺余り、十歳ばかりの小児の大ききで、手足も完全に出來、頭には昔風の島田しまだを結ゆい、昔染の大柄友染ゆうぜんが着せてあるのでございます。これも後に伺つたのですけれど、それが立木という人形師の作風なのだそうで、そんな昔の出來にも拘らず、その女兒人形は、不思議と近代的な顔をしているのでございます。真ツ赤に充血して何かを求めている様な、厚味くちびるのある唇、唇の両脇で二段になつた豊ほうき類、物いいいたげにパツチり開いた二重ふたえまぶた瞼、その上に大おお様に頬笑ほほえんでいる濃い眉まゆ、そして何よりも不思議なのは、羽二重はふたえで紅べに綿わたを包んだ様に、ほんのりと色づいている、微妙な耳の魅力でございました。その花はなやかな、情慾的な顔が、時代のために幾分色があせて、唇くちばしの外ほかは妙に

青ざめ、てあか手垢がついたものか、なめら滑かな肌がヌメヌメと汗ばんで、それゆえに、一層悩ましく、なまめ艶かしく見えるのでございます。

薄暗く、樟脳臭い、土蔵の中で、その人形を見ました時には、ふつくらと恰好よくふくらんだ乳のあたりが、呼吸をして、今にも唇がほころびそうで、その余りの生々しさに私はハツと身みぶる震を感じたほどでありました。

まあ何ということでございます、私の夫は、命のない、冷たい人形を恋していたのでございます。この人形の不思議な魅力を見ましては、もう、その外に謎の解き様はありません。人嫌いな夫の性質、蔵の中の睦言、長持の蓋のしまる音、姿を見せぬ相手の女、色々の点を考え合せて、その女と申すのは、実はこの人形であったと解釈する外はないのでございます。

これは後になって、二三の方から伺ったことを、寄せ集めて、想像しているのでございますが、門野は生れながらに夢見勝ちな、不思議な性癖を持っていて、人間の女を恋する前に、ふとしたことから、長持の中の人形を発見して、その持つ強い魅力に魂を奪われてしまったのでございましょう。あの人は、ずっと最初から、蔵の中で本なぞ読んではいなかったのでございます。ある方から伺いますと、人間が人形とか仏像とかに恋したため

しは、昔から決して少くはないと申します。不幸にも私の夫がそうした男で、更に不幸なことには、その夫の家に偶然稀代の名作人形が保存されていたのでございます。

人でなしの恋、この世の外の恋でございます。その様な恋をするものは、一方では、生きた人間では味わうことの出来ない、悪夢の様な、或は又お伽噺の様な、不思議な歓楽に魂をしびらせながら、しかし又一方では、絶え間なき罪の苛責に責められて、どうかしてその地獄を逃れたいと、あせりもがくのでございます。門野が、私を娶つたのも、無我夢中に私を愛しようと努めたのも、皆そのはかない苦悶の跡に過ぎぬのではございせんか。そう思えば、あの睦言の「京子に濟まぬ云々」という、言葉の意味も解けて来るのでございます。夫が人形のために女の声色を使っていたことも、疑う余地はありません。ああ、私は、何という月日の下に生れた女でございましょう。

## 九

さて、私の懺悔話と申しますのは、実はこれからあとの、恐ろしい出来事についてでございます。長々とつまらないおしやべりをしました上に「まだ続きがあるのか」と、さぞ

うんざりなさいませうが、いいえ、御心配には及びません。その要点と申しますのは、ほんの僅かな時間で、すっかりお話出来ることなのでございますから。

びつくりなすつてはいけません。その恐ろしい出来事と申しますのは、実はこの私が人殺しの罪を犯したお話でございます。その様な大罪人が、どうして処罰をも受けないで安穩んのんに暮しているかと申しますと、その人殺しは私自身直接に手を下した訳でなく、いわば間接の罪なものですから、たとえあの時私がすべてを告白してしましても、罪を受けるほどのことはなかつたのでございます。とはいえ、法律上の罪はなくとも、私は明かにあの人を死に導いた下手人げしゆにんでございませう。それを、娘心のあさはかにも、一時の恐れにとりのぼせて、つい白状しないで過ごしましたことは、返す返すも申訳もうしわけなく、それ以来ずっと今日こんにちまで、私は一夜としてやすらかに眠つたことはありません。今こうして懺悔話をいたしますのも、亡き夫への、せめてもの罪つみほろ亡ぼしてございませう。

しかし、その当時の私は、恋に目がくらんでいたのでございませう。私の恋敵こいがたきが、相手もあろうに生きた人間ではなくて、いかに名作とはいえ、冷い一個の人形だと分りますと、そんな無生むしやうの泥人形に見返られたかと、もう口惜しくて口惜しくて、口惜しいよりは畜生道ちくしやうじやうの夫の心が浅間あさましく、もしこの様な人形がなかつたなら、こんなことにも

なるまいと、はては立木という人形師さえうらめしく思われるのでございます。エエ、まよこの人形奴めの、艶かしいしゃつたら這面をを、叩きのめし、手足を引ひっちぎってしまったなら、門野とてまさか相手のない恋も出来はすまい。そう思うと、もう一ときも猶ゆうよ予がならず、その晩、念のために、もう一度夫と人形とのおう瀬を確めた上、翌早朝、蔵の二階へ駈上つて、とうとう人形を滅茶滅茶めちやめちやに引ちぎり目も鼻も口も分らぬ様に叩きつぶしてしまったのでございます。こうして置いて、夫のそぶりを注意すれば、まさかそんな筈はないのですけれど私の想像が間違っていたかどうかも分る訳なのでございます。

そうして丁度人間の轢死れきしにん人の様に、人形の首、胴、手足とばらばらになって、昨日に変わる醜いむくろをさらしているのを見ますと、私はやっと胸をさすることが出来たのでございます。

## 十

その夜、何も知らぬ門野は、又しても私の寐息ねいきを窺いながら、雪洞をつけて、縁外えんそとの闇へと消えました。申すまでもなく人形とのおう瀬を急ぐのでございます。私は眠ったふ

りをしながら、そつとその後姿を見送つて、一応は小気味のよい様な、しかし又何となく悲しい様な、不思議な感情を味わつたこととでございます。

人形の死骸を発見した時、あの人はどの様な態度を示すでしょう。異常な恋の恥かしさに、そつと人形のむくろを取り片づけて、そ知らぬふりをしているか、それとも、下手人を探し出して、怒りつけるか、怒りのまま叩かれようと、怒鳴られようと、もしそうであったなら、私はどんなに嬉しかろう。門野が怒るからには、あの人は人形と恋なぞしていなかったしるしなのですもの。私はもう気もそぞろに、じつと耳をすまして、土蔵の中の氣勢を窺つたのでございます。

そうして、どれほど待つたことでしょうか。待つても待つても、夫は帰つて来ないのでございます。壊れた人形を見た上は、蔵の中に何の用事もない筈のあの人が、もういつもほどの時間もたつたのになぜ帰つて来ないのでしょう。もしかしたら、相手はやっぱり人形ではなくて、生きた人間だったのでありませうか。それを思うと気が気でなく、私はもう辛抱がしきれなくて、床から起き上りますと、もう一つの雪洞を用意して、闇のしげみを蔵の方へと走るのでございました。

蔵の梯子段を駈上りながら、見れば例の落し戸は、いつになく開いたまま、それでも上

には雪洞がともつていると見え、赤茶けた光りが、階段の下までも、ぼんやり照しております。ある予感にハツと胸を躍おどらせて、一飛びに階上へ飛上つて、「旦那様」と叫びながら、雪洞のあかりにすかして見ますと、ああ私の不吉な予感は適中したのでございました。そこには夫のと、人形のと、二つのむくろが折り重なつて、板いたの間は血潮ちしおの海、二人のそばに家重いえじゆう代だいの名刀が、血を啜すすつてころがつているのでございます。人間と土くれとの情死、それが滑稽に見えるどころか、何とも知れぬげんしゆく 厳げん 肅しゆくなもの、サーツと私の胸を引しめて、声も出ず涙も出ず、ただもう茫然ぼうぜんと、そこに立ちつくす外はないのでございました。

見れば、私に叩きひしがれて、半残なかばつた人形の唇から、さも人形自身が血を吐いたかの様に、血潮の飛沫が一しずく、その首を抱いた夫の腕の上へタラリと垂れて、そして人形は、断末魔だんまつまの不気味な笑いを笑つていたのでございました。



# 青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版1刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻」春陽堂

1926（大正15）年9月26日発行

初出：「サンデー毎日」大阪毎日新聞社

1926（大正15）年10月1日

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

※「怒」に対するルビの「おこ」と「いか」の混在は底本通りです。

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：まつもり

2018年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 人でなしの恋

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>